

[27]

氏名	小坂 智子
博士の専攻分野の名称	博士（心理学）
学位記番号	心博第 48 号
学位授与の日付	2024 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	発達障害児・者の親の心的外傷後成長（PTG）と スティグマ
論文審査委員	主 査 教 授 串崎 真志 副 査 教 授 加戸 陽子 副 査 教 授 木戸 彩恵

論文内容の要旨

本論文は、発達障害児・者を育てる親のポジティブな成長である心的外傷後成長（posttraumatic growth: PTG）とネガティブな感情を引き起こすスティグマの関連について検討したものである。本論文は 8 章から構成されている。第 1 章・第 2 章では、研究の背景として、PTG における概念と関連する先行研究を整理し、本研究で検討する理論モデル（Tedeschi, Shakespeare-Finch, Taku, & Calhoun, 2018）について概観した。続いて第 3 章～第 7 章では、質的・量的調査を重ね、PTG とスティグマの関係を検討した。第 8 章では総合考察を行った。要旨は以下の通りである。

第 1 章では、PTG の概念と関連する研究について紹介した。はじめに、PTG の基本的な概念、特徴、最新の理論モデルを紹介した。そして、PTG に関連する研究をまとめた。さらに、PTG とは対照的に、人生を揺るがすような危機の後に起きるネガティブな感情の変化である心的外傷後低下（posttraumatic depreciation: PTD）についても紹介した。

第 2 章では、まず発達障害の定義、発達障害児・者を育てる親に関する先行研究、発達障害児・者を育てる親の PTG の研究について概観した。次に、スティグマの概念、先行研究、発達障害児・者の親のスティグマに関する先行研究について紹介した。最後に、自己愛について、その概念と関連する研究について紹介した。また、自己愛と PTG についても概観した。

第 3 章～第 5 章は質的調査の報告である。第 3 章（研究 1）では、発達障害児をもつ親 2 名に半構造化面接を実施した。日本からバンクーバーに移住し、再び日本に帰国したという文化移行（社会文化的影響）において、発達障害に対するスティグマのパースペクティブ（捉え方）がどのように変容したかを、複線径路等至性モデル（trajectory and equifinality model: TEM）で分析した。その結果、日本の不十分な支援体制にスティグマ

を感じたが、それを省察することで、「支援者としての自分」という新たな可能性を見出したことが示唆された。

第4章（研究2）では、発達障害児をもつ親であり、かつ保育士養成校に通っている社会人学生4名を対象に半構造化面接を行った。社会文化的影響（ソーシャル・サポート）が、PTG実感にどのように影響を及ぼしているかを、ストラウス版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）で分析した。その結果、満足のないソーシャル・サポートに社会的スティグマを感じる一方で、満足いくソーシャル・サポートとして、先達である保育士や療育の指導者に感銘を受け、彼らをロールモデルとすることで、人生に対する感謝や人としての強さを感じていることが示唆された。

第5章（研究3）では、発達障害児をもつ親（シングルマザー）であり、かつ保育士養成校に通っている社会人学生3名をフォーカスグループとして、オンラインで半構造化面接を行った。ロールモデルとの出会いやPTGへの影響について、解釈的現象学的分析（interpretative phenomenological analysis: IPA）によって分析した。その結果、ロールモデルとの有意義な相互作用が、学ぶことへの感謝や保育者としての自信につながっていることが示唆された。

第6章・第7章は、量的調査の報告である。第6章（研究4）では、発達障害児・者の親166名（男性64名、女性102名、平均44.17歳）を対象に、心的外傷後成長尺度短縮版、セルフ・スティグマ尺度短縮版を、オンライン調査会社に依頼して実施した。クラスター分析によって回答者を分類したところ、PTG得点もスティグマ得点も高めの人68名（40.9パーセント）いることが明らかになった。この群はPTGとスティグマが並存する状態だと考察された。

第7章（研究5）では、発達障害児・者の親175名（男性86名、女性89名、平均46.03歳）を対象に、心的外傷後成長尺度短縮版、セルフ・スティグマ尺度短縮版、自己愛人格目録短縮版を、オンライン調査会社に依頼して実施した。クラスター分析によって回答者を分類したところ、PTG得点もスティグマ得点も高めの人52名（29.7パーセント）いることが明らかになった。注目賞賛欲求を説明変数、スティグマを媒介変数、PTGを目的変数とした媒介効果を検証したところ、間接効果が有意傾向、総合効果が有意であった。すなわち、注目賞賛欲求が高いほどスティグマを感じることになり、そのことがPTGを低くしていた。

第8章では以上をふまえ、発達障害児・者の親のPTGの過程について総合考察を行った。Tedeschi et al. (2018) のモデルと同様、PTGは社会文化的影響（ソーシャル・サポート、ロールモデル）によって自分に自信をもつことで進むが、ときにスティグマと並存する状態にあることが考察された。最後に、一人でも多くの発達障害児・者の親がポジティブな成長を遂げられる支援システム（社会文化的影響）について、今後の展望を示した。

論文審査結果の要旨

本論文は、発達障害児・者を育てる親のポジティブな成長である心的外傷後成長

(posttraumatic growth: PTG) とネガティブな感情を引き起こすスティグマの関連を検討した試みである。質的・量的な両側面から調査したことは、基礎研究として意義あるものとなっている。その結果、発達障害児・者の親のポジティブな成長 (PTG) の過程において、スティグマによるネガティブな感情が併存している人が 3 割～4 割いることを示したことは、特筆される知見である。

以下に、心理学研究科が定める博士学位論文審査基準 (課程博士) に従って、審査委員の見解を述べる。

1. 問題意識が明確で、課題設定が適切であること

発達障害児・者を育てる親のポジティブな成長である心的外傷後成長 (posttraumatic growth: PTG) と、ネガティブな感情を引き起こすスティグマの関連を検討するという問題意識が明確である。課題設定についても概ね適切であるが、発達障害の重症度が研究計画として考慮されていない点が指摘された。

2. 国内外の先行研究を適切に検討、吟味していること

PTG に関する国内外の研究を網羅、検討しており、申し分ないといえる。

3. 研究目的に照らして研究・分析の方法が適切であること

研究目的に照らして概ね適切に分析しているが、質的な分析における解釈の適切性、量的な分析方法の理解、数値の記述に、誤りや不十分な箇所があった。さらに踏み込んだ分析と丁寧な検討が必要な部分も指摘された。

4. 論文構成が的確で、論理的展開に整合性、一貫性、説得性があること

全体として概ね的確であるが、理論的な展開が十分でない箇所、結果を過剰に解釈している箇所も指摘された。

5. 全体を通して学術的な独創性が認められること

PTG の過程において、スティグマによるネガティブな感情が併存している人が 3 割～4 割いることを示した点は独創的であり、学位論文にふさわしい学術的な独創性を有すると評価できる。今後は、その側面について、さらなる精緻化が期待される。

6. 国内外の学会や社会に対して貢献が認められること

本論文は、発達障害児・者を育てる親のポジティブな成長という社会的意義の高い研究であり、基礎研究の一つとしても貴重であると認められる。

以上のように、研究を重ねることによって得た知見は、博士論文審査基準からみて適切だと判断できる。よって、本論文を博士論文として価値あるものと認める。